

山姥 (月花茲友鳥)

へ懸河渺々として巖岬々たり 山また山の大名題 薪に花の山賤は
へ曲げたる肘の高枕 煙草の煙々々と雲を吹くなる中空に

へア、ラ不思議やな 今思はずもまどろむうち 空にありく赤色の雲の有様
目前不思議は 此の山中に人こそ隠れ住むという 知らせなるか 何にもせよ
奇代なことを見るものだなア ウム 夫れはそうと 頼光公の仰せあつたは此
の山蔭の嬖衆と小僧 どれ訪れて見べいか

へ立ち寄る軒の柴の戸にへ 蔦の錦を織姫の 五百機ならぬ糸車 めぐる
浮世を捨てし身は 櫛せぬ髪の自ら 鬼とや人の見るやらん

へおふくろ此の頃は逢ひませぬノウ

へオ、誰かと思へば斧藏殿

へ時に小僧はどうしました

へさつきにまでいたづらして居りましたが 大方また猪、猿を相手に相撲て
がな 居りましようわいのオ

へそりやアあぶない 後先見ずの頑是なし 呼っせいく

へほんに怪我でもせねばよいが

へ木の間がくれに ちらくくと へ夫れと見つけて

へ怪童 怪童丸ヤーイ

へオー

へ神楽月とて片山里も 笛や太鼓で面白や 足のつめたに 草履買うて
たもれ 子をとろ子とろ どの子が目づき 後の子が目づき かごめく
籠の中の鳥は いつく出やる 夜明の晩につるくくつ、ぺった
木の間笹原 くゞりくゞって ひよいと来た幼児

へコレ母さん おりやこんな花 折つて来たよオ

へ花うちしようと振り立て、わやく盛りぞ愛らしき

へどりや 一ぶくやらかすべいか

へ母さん何ぞ下されや

へオ、遣りましようくこれくく

へこんなよい物誰にやる かにやる いったち愛しいほんそ子に へ鈴や
つぼくでんく太鼓廻れや廻れ風車 くるりくるくくくるくと世
をうつ蟬のから衣 千声万声の砧に合せ 鼓の拍子して打つや

へコレく小僧 この鉞を馬にして

へオ、こりやよかろう サアく怪童お馬がまいる

へハイくハイ

へ月毛にあらぬ斧の駒 取るや手綱もり、んしげに

へ先のけく先のける

へお月様いくつ

へ十三七つ

へ御供はいくつ

へ八十八つ

へほんにそりや若いな

へ山家踊は

へ何と云た

へおんらが在所はナア 奥山ので、うちの でんぐりく 栗の木の
木の根を枕に こざれ抱いて転び寝

へ母さま乳飲もう

へこれはしたり ソレおじさまが見て笑うてぢや 夫れよりはまた山めぐりの
話をしようほどにな

へそんならおふくろ おれも山めぐりの話を 此処で聞くべいか

へさればいのう 昔がたりもはずかしい ありし姿もどこへやら 無明の滝に

髪洗い 若葉を見ては春を知り 妻恋う鹿の音をきいて 秋と思うて深山路の

明日明日の山めぐり

へよし足曳の山廻り 四季の眺めも面白やへ梅が笑えば柳が招く 風の
まに／＼早蕨の 手を引添うて弥生山 へつくろう花の仇桜へ桃は気儘
に山吹も見果てぬ中に春過ぎて 早卯の花と花がつみへそしてあやめ
菖蒲や杜若 ほっそりと時鳥 アレタ立に濡れ忍ぶ 涼風がえへ雁が届
けし玉章は小萩の袂蒨萱に 返事紫苑も朝顔の へ遅れ咲なる恨み詫び
露にも濡れてしっぽりと 伏猪の床の菊襲ね よい／＼よい／＼よいや
さへよいや冴え行く初時雨 松も杖つく老の坂

へおらも嫁入てナア 来た時やほんにサへ爺様上下へわしや丸綿で 顔
に茜も恥かしかった盃へ今は朝茶に念仏拝んで おありかた衣角かく
し 女夫で参るお朝事や 我は子故に室咲の 花を尋ねて山めぐり

へ如何さま親というものは有難いものだ 然し女の身にて此の山中へ引こも
りしは 仔細ぞあらん 我こそは源家の臣 三田の仕という者 願によつては
力となつて得させん 様子は何と

へそんならあなた様が三田の仕さまとや 此の上は何をか お隠し申しましょ
う 我々こそは坂田の蔵人時行が 妻子の者でござりまする

へヤ扱てこそなア

へ願は夫 時行過ぎ去る折 胎内に宿せし一子 男子なれば武士に育て上げ

一天下に名を上げさせよとの遺言により此の足柄の山神に祈誓をかけ早
七年ある夜の夢枕に怪童こそはあつぱれ天下に英雄の名を上げん心を
つけて育てよとの神の御告

へホ、オ驚き入ったる物語 母が丹精山神の加護 勇力さこそと思はわる、
怪童此の場でそれがしと力のほどを試し見るか

へオ、コリヤよかろう 怪童必ずともに負けまいぞ

へサア来い 怪童

へ合点だ

へ神変不思議の怪童丸 此方はあしらう勇力士 怪童焦って傍へなる
松を根こぎに引抜いて ぶんじがったる有様は 人も恐る、計りなり

へウン 其の松の根こぎ面白い サア打って来い

へ合点だ

へ勝負／＼と打ちかゝるを すかさぬ強気のカこぶ 幹より腕の節くれ
てしつかと掴めばめり／＼／＼ えいや／＼と捻じ切って 左右へ別
れて立ったりしは 目覚しかりける次第なり

へオ、力の程は試し見た 今より頼光公の家臣となさん

へ何がさて母が喜び此の上なし

へ然らば今より父が其の名を 坂田の公時と名乗らせん

へそんならおれは 侍になるのか嬉しい／＼

へオ、嬉しかろう／＼ 去りながら今別るればこの母に また逢うことはな
らぬぞや 怪童こゝへおじゃ

へ夫の形見と見るにつけ そなたの大事さ大切さ 今日別るれば今宵よ
り 母一人寝の閨の内 さぞ面影の懐かしからうへ頼光公へ御奉公 勤
むる暇の明暮に

へ武術を励み奉公せよ 必ず／＼人様に

へ山姥が子と笑われな

へ今別る、とも此の母が

へそなたの影身に附添いて なお行末を守るべし とは言うもの、これ
がまあ 名残惜しやいとおしやと 抱き上げ抱き付き 思はずわっーと
一声は 梢に響き哀れなり

へ我れながら恥かしや 望み足りぬる上からは 輪廻を離れん怪童丸 名残は
尽きじ早去らば

へいとま申して帰る山の へ峰の梢も白妙や 源氏の武名尽せなき 実
さへ花さへ立花の 賑ふ櫓ぞ久しけれ 栄うる櫓ぞめでたけれ。